日野啓三　昭和二十九年の文業（下）

山内祥史

Ⅰ　「現代評論」創刊号

日野啓三の昭和二十九（一九五四）年後半期の文業で目に立つのは、「現代評論」に所掲の諸稿である。「現代評論」は、奥野健男と日野啓三とが語らい「立場を越えた新しい評論同人誌を計画」。「現代の現実」に対する「批判機能」「批評精神」を発現するために、奥野健男、菊地昭吾、清岡卓行、都留晃、野島薫、服部達、伴野達也、日野啓三、村松剛の九名を編集委員として創刊された。創刊号「編集後記」には、つぎのような言説がある。

現代の現実に対するとき、僕達の精神は必然的に批評のかたちをとつてあらわれる。現代のあらゆる既成秩序が、僕達の生存と自我の成長を軛殺しようとかかつているとき、僕達は反対し、それらを否定することによつてしか、自己を主張することも表現することもできない。悪しき時代の子は、創造より批判を、建設より破壊を、肯定より否定を、先行させねばならない。僕達の前にある現実の壁につきささり、つきやぶることによつてのみ、新しい道は拓かれ、新しいものを産み出し得る。

そして今日においては、小説も詩も美術も、また科学も、その底に批評を内包せずしては存在し得ないであろう。僕達がこの雑誌を「現代評論」と名付けたのは、単に狭い意味での評論のジャンルを意味するのではなく、現代に対するこのような精神の批判機能、批評精神そのものを指してである。

戦後簇生し、若い世代の文業を掲げてきた諸雑誌のうち、「人間」（昭和二十一年一月創刊、昭和二十六年八月終刊）「展望」（昭和二十一年一月創刊、昭和二十六年九月終刊）「綜合文化」（昭和二十二年七月創刊、昭和二十四年一月終刊）「個性」（昭和二十三年一月創刊、昭和二十四年一月終刊）等が次々と廃刊。「近代文学」に昔日の勢いがなくなっていた。さらに、旧制一高出身者によって発行されていた「世代」（昭和二十一年七月創刊）も、昭和二十八年二月に終刊し、村松剛、清岡卓行、大野正男、浜田新一などの若い評論家や詩人たちが、自分達の発表の場を索めていた。「〈座談会〉『近代文学』の功罪」（「近代文学」第十九巻第三号、昭和三十八年八月一日付発行、終刊号）で、日野啓三は「『近代文学』がある時期から急につまらなくなってしまったのは、たしかだ」といい、「一回、譲り渡すと

いう問題があった」が「受け継」がなかったという。「僕達はどうしても自分達の手で発表の場をつくらねばならない」という想いを強くして「僕達、若い世代は、各々の小さな殻を破り捨てて、この「現代評論」に結集した。「現代評論」は縦横に小説・詩をはじめすべての芸術を貫ぬく批評精神を、横絲に単に芸術だけでなく、社会、人間、自然、のすべての分野を統一する広い評論というジャンルを打ち建てたい。」と考えたという。当時二十歳代前半から三十歳代前半までの若手評論家の精鋭を糾合し、「現代評論」は創刊されたのであった。雑誌発行の中核になったのは、創刊号と第二号との奥付に「編集人」として氏名が記載されている奥野健男と、第二号に「編集後記」を掲載している日野啓三とであったと思われる。創刊号の「編集後記」は無署名だが、筆致から推して日野啓三の手になるのではないかと思われるが、確証はない。

創刊号は「昭和二十九年五月二十日印刷／昭和二十九年六月一日発行」「編輯人　奥野健男」「発行人　波良彰一郎」「発行所　東京都千代田区神田駿河台三ノ五　現代文学社」「印刷所　大同印刷株式会社」であった。創刊号に所掲の諸稿を目次に準じて示すと次のようである。

特集・現代について　7～40

後進国における現代の課題―マニフェストにかえて―　日野　啓三　7～18

現代思想の基点　村松　剛　19～28

方法敍説　服部　達　29～40

現代評論

⑴ジョアン・ミロ論―現代絵画のあだ花―　東野　芳明　71～75

⑵新劇の二元性　野島　薫　76～77

⑶現代音楽小論―ドデカフォニズムについて―　矢島　繁良　78～79

⑷ソヴエトにおける現代詩　工藤　幸雄　80～81

⑸現代の神話　日野　啓三　82～85

存在と形成―キリスト者のリアリズムについて―　佐古純一郎　41～46

現代のペトロニウス　木内　公　47～51

詩

眼　大岡　信　64～65

二重の未来　清岡　卓行　66～69

皿を焼く人　飯島　耕一　70

地下生活　大森　忠行　114～115

職場と文学（文学時評）　高原　西蔵　101～103

マルキ・ド・サド評伝　遠藤　周作　104～109

反逆の倫理―マチウ書試論―　吉本　隆明　52～63

芥川龍之介論―枠の構造について―　大野　正男　86～94

中野重治論―評価の基準―　奥野　健男　95～100

創作

鬼剝げ　島尾　敏雄　110～117

編集後記　118

「特集・現代について」巻頭の日野啓三「後進国における現代の課題―マニフェストにかえて―」は、「大審問官論」（「近代文学」第九巻第三号・昭和二十九年三月一日付発行）や「アルベール・カミュと正義―『正義の人々』について―」（「三田文学」第四十四巻第四号・昭和二十九年五月一日発行）で論及してきた、「いかに生くべきか」「われら何をなすべきか」といった「人間」を「主体」とした問題に傾倒し、当時彼が取組んでいた「後進国」「過渡期」「知識人」等のうち、「後進国」の問題に焦点を絞って包括的に論及したものであった。

敗戦後日野啓三は、「経済構成の土台に、社会生活の隅々に、われわれの心理の奥深くにまで前近代的要素があまりにも根深く広汎に残されていることを、はっきりとみてしまった」という。上は支配機構、経済組織、教育制度から、下は人々の日常の習慣、思考方法、感受性、生活態度まで、前近代的な遺制は助長、温存、利用されて、今日に到っている。「古式ゆかしい世襲君主制と巨大なコンツェルン、身分隷属的な雇用制度と最新式の大工場、義理人情の美風と近代的デカダンスの風潮とが渾然と共存している」というのだ。「前近代の矛盾、擬性近代の矛盾、そして社会主義への移行の困難」と「われわれの重みは三重である」とみて、日野啓三は「先進国」における「基本的な歴史法則」を次のようにみる。

封建的前近代が資本主義的近代にとってかえられ、近代はその勃興、発展、頂上の過程を経てやがて爛熟、行詰り、解体の時期に至り、社会主義によって矛盾を止揚される

その限り「資本主義的近代」と「社会主義」とは、「発展段階を異にする別な二つの世界」であり、「近代化」と「社会主義化」とは「同時に遂行するべきもの」ではなく「二者択一」であるといえる。だが日野啓三は、この「近代化」と「社会主義化」とを、切りはなすことのできないところに、「後進国の特殊性」がある、というのだ。

「西欧への劣等感に根ざす近代主義者」と「歴史的必然によりかかる進歩主義者」とは、「後進国の条件を無視」することによって、「この国の非人間的条件の全体的な変革に失敗する」のだ。両者に共通するのは「現実認識の一面性」と「人間の不在」とだという。「近代のための近代化、歴史のための社会主義化」に対して、日野啓三は「人間のための近代化と社会主義化との同時遂行」という立場をとる。「前近代的な残存物の徹底的な清算」と「資本主義体制の根本的な変革」とを「同時に行うことこそわれわれの課題である」というのだ。そして「人間こそこの世界に意味ある唯一の存在である」という「信念の未成熟の状態」が、この「後進国の特殊性」だと、日野啓三は批判する。日野啓三の立場は「社会主義的人間主義」とでも名付けられるものだ。「コンミュニズムだけがわれわれに自由と平等と正義と幸福を獲得する可能性を具体的に指示する唯一の処方箋である」と主張する一方、「人間とは」とは自問して「現実の非人間性への反抗を通じて不断に人間的であることを自ら選ぶ自覚的意志の謂いだ」と、日野啓三はいう。「人間」として生きるために「歴史の必然的な法則」を利

用することによって「歴史」をこそ「人間の手段」とすることを望むのだ。「現存秩序への反抗」を「社会主義への展望の下に行う」というのが、日野啓三の示す「条件」であった。

「この世界で意味あるものは人間だけだ」と、当時の日野啓三は信じ続けていた。「他人の不幸によって支えている秩序の中に居心地よくおさまっていること」など多くの「不合理」多くの「屈辱」多くの人々の「悲惨な生活」の余りにも多いこの「現実」に何の「嫌悪」も「反撥」も「不満」も感じないこと、あるいはその「不正」と「悲惨」とを「何ものかの名によって正当化」し、その「存続に同意を与える」ことは「人間的」と呼ぶことはできない。現在にあっては、この「秩序」と「調和」しないこと、「明らかな意識」とともに「反抗という倫理」を自らに課すこと、「批判的」「反抗的」ということが「人間的」であることの最も確実な内容である、と考えるのである。

このひとつのことを、「それだけは自分自身のものとして信じられる」故に、この「確信を共有する者たち」が集まって「現代評論」を創刊したというのだ。この「マニフエスト」を貫いている「後進国の社会的、心理的現実を離れてはだめだ」という態度、「近代化という操作も自分の足許から、自分の内側から行わねばならない」という態度は、「近代文学」の強い態度で、日野啓三は「「現代評論」のマニフェストを書いたときはその影響があった」と回想している。

また「現代評論」欄の日野啓三「現代の神話」は、(1)現代絵画(2)現代演劇(3)現代音楽(4)現代詩に続く(5)として、現代世界の政治的状況を論じたもの。「ソヴエトの侵略の脅威」という「現代の神話」を手がかりに、スターリン逝去後のソヴエトの動静をふまえながら、資本主義諸国のアメリカと日独、アメリカと英仏、英仏と日独等の各国間の矛盾を考察して、「米ソ原爆戦はないという希望」は、「第三次帝国主義戦争の不可避性という絶望」に代り、そのときこそ「われわれに変革の機会が提供されるかもしれないという希望」が生まれる、と論じている。これが「神話のヴェールを剥ぎとったとき」の「この時代の現実」である、というのだ。のちに日野啓三は「死について」（「すばる」第十四巻一号、平成四年一月一日付発行）で「あのころは危なかった。朝鮮戦争直後、ソ連が五十メガトン水爆をつくったころ」だ、と語っている。

却説「現代評論」の創刊は、当時の文学界では目に立つ出来事で、各誌において多くの紙幅が割かれて紹介された。山室静、荒正人、佐々木基一、久保田正文、奥野健男、平野謙連名の「文藝時評」（「近代文学」第九巻第七号、昭和二十九年七月一日付発行）には、つぎのような評言が見られた。少し長いが、「『現代評論』創刊号」の評言全体を引用しておこう。

> この雑誌に集る若い人たちは、彼ら自身も予期していなかつた新しい場所に向つて大きく踏み切ろうとしている、――という感じを強く受ける。彼らがみずから何か新しいものを予感して、というよりは、むしろ次第に強まる現実の圧力に押されて、といつた方が正しいかもしれないが、とにかく現在の日本というみかけ以上に複雑な現実の盲点を手さぐりでさがしあてようとしている彼らの共通の努力は買われていいだろう。近頃「第三の新人」という名前で呼ばれている三十代の小説家たちが、次第に現実との

妥協的態度に傾きがちなことと比べてさらにその感が深い。

この創刊号には評論六篇、評伝一篇（マルキ・ド・サド）、詩四篇、小説一篇、それに十枚位の短い論文五つが収められている。それぞれの扱う対象、対象に迫る態度と方法、あるいはその立場は大そう区々だが、通読してみると意外なほど共通の主題同じ雰囲気が支配しているのに驚く。

たとえば、日野啓三は『後進国における現代の課題』というマニフェストの中で、ややくどい位に、前近代、近代、社会主義、という一元的な歴史観と西欧的な人間観に対する信仰に疑問を提出しているが、服部達もその『現代世界考察の方法』の中で「ヨーロッパ的な概念のみに頼つてわれわれの現実を認識しようとすることには、ある限界がある」点を精密に指摘して、「日本的現実に即した認識の方法」の必要を強調している。また奥野健男は中野重治を論じて、これまでの中野重治の評価の仕方がいかに根本的に誤つていたか、と彼自身でも意外だつたと思われるような結論を大胆に導きだし、その誤りの根本はこれまでの評家の批評方法が暗黙のうちに「社会秩序の内側」つまり、秩序から疎外された民衆の意識の外側で育つた温室育ちの方法によつていた点をはつきりと示している。

もちろんまだ彼らは自分たちの予感を充分に展開しているとはいいがたいし、言葉づかいや論理の展開の仕方に無理なところ、粗雑なところが少くない。この点、彼らが本当に「秩序の外側」に自分たちの精神を根拠づけようとしているのならば、もつと「誰のために書くか」という問題を考えていいようにも思われる。

しかしそれにも拘らず、現在の日本の現実と明哲に対決しようとすると、これまでのようなヨーロッパそのままの近代主義的な方法、あるいは秩序の内側の思考法では、最も根本的な問題の所在が盲点となりかねない危険性を彼らは実感しているようだ。認識の方法を変革するとともに主体的に自分たちの位置を秩序の外側に意志的におしやる努力――それが現在の彼らの主題となつているゆえんであろう。木内公の『現代のペトロニウス』、吉本隆明の『反逆の倫理』、大野正男の『芥川龍之介論』などは、こうした既成秩序への反抗という仕方で、現実と人間性との生き生きとした関係を恢復しようとする努力を示している。村松剛がヴァレリーからサルトルへの道について論じているのもこのことだ。

もしかすると、こうした新しい人たちの自主的な努力によつて、これまで不徹底にしか批判されなかつたわれわれのもろもろの壁や歪みや盲点が次第に明らかにされ、思いもかけなかつた新しい展望がひらける端緒となるかもしれない――というのは、評者のこの新しい雑誌に対する強すぎる期待でもある。

また、荒正人「同人雑誌評」（「文学界」第八巻第八号、昭和二十九年八月一日付発行）には、「今月も幾つかの新しい雑誌が創刊されているが、そのなかで**現代評論**と**今日**は注目すべき季刊である。」とし、つぎのような評言があった。

前者では、「現代について」を特集し、日野啓三が「後進国における現代の課題」といふ文章をマニフエストとして発表してゐ

る。

「われわれの門はひらかれている。後進性によるものであれ近代の行詰りに由来するものであれ、われわれの周囲の非人間性を憎むもの、真の近代という名で呼ばれようと来るべき社会主義社会という名で表現されようと、現代よりもわれわれの内心の明らかな要求に応えることのできる世界をのぞむもの、そのための変革の事実にそれぞれの力と知識と技術と努力と希望を賭ける意志のあるすべての人々はわれわれの同志であるとわれわれは呼びかける。」

私はこの広い視野に好感を寄せる。だが、近代化の蜜月時代をいひ、平和革命の幻想について批判するとき、この筆者は、戦後像の平面図しか捉へてゐないのではないと疑ふ。亀井勝一郎は、無血革命と軍備の撤廃を、現代の理想として掲げてゐる。また、野上彌生子は、火焔ビンと原子爆弾の結びつきを指摘してゐた。「ビキニの灰」といふ全く新しい事態に直面した今日となつてみれば、このマニフェストは現代の実態から浮きあがつてゐる。「平和革命」や「近代化」を乗り越えてゆく智慧がひからびてゐる。現代を捕捉するには、マルクスの夢みた人類の地平線といふ心象に辿り着かなくてはならぬ。その点では、吉本隆明の「反逆の倫理」（マチュウ書試論）の行き方にむしろ期待したい。日野啓三はかういふものを勉強する必要がある。

荒正人の評言はきびしく、「マルクスの夢みた人類の地平線といふ心象」に「辿り着く」ことや、吉本隆明「反逆の倫理」の「行き方」を「勉強する」ことを慫慂している。しかし、「近代化」といい、「平和革命」といい、「現代の実態」といい、すべて「人間」や「人類」を「中心」に据え、他の存在は人間的主体の「表象」の対象に変ずるという、「意志」を本性とした思考である。「人間」を「中心」に「世界」を見て、天が動く見る天動説と同様の世界観といってよい。当時の荒正人の「意識の場」は、当時の日野啓三と同様「人間」に限定されていて、「宇宙」にまでは拡大されていなかったようだ。

Ⅱ　「現代評論」第二号

「現代評論」第二号は、奥野健男、村松剛、清岡卓行、東野芳明、野島薫、服部達、大野正男、日野啓三の八名が編集に当たった。「昭和二十九年十二月一日発行」「編集人　奥野健男」「発行人　波良彰一郎」「発行所　東京都千代田区神田駿河台三ノ五　現代文学社」「印刷所　株式会社堀内印刷所」であった。第二号に所掲の諸稿を目次に準じて示すと、次のようである。

特集・現代思想家論　7～65

清水幾太郎論　浜田　新一　7～12

小林秀雄論―教祖の運命―　村松　剛　13～25

中野重治論―思想と自我のむすびつき―　奥野　健男　26～32

伊藤整論―伊藤整の思想・素描―　服部　達　33～40

埴谷雄高論　あるいはひとつの精神的悲劇について　日野　啓三　41～52

武谷三男論―思想と実践―　杉浦　俊男　53～65
二十世紀外国文学研究　66～81
アンドレ・ジイド論―小説概念の革新（Ⅰ）―　若林　真　66～74
ソヴエト文学はどうなる　工藤　幸雄　75～81
現代評論　82～95
⑴何が「空白」か―なかの・しげはるの『空白』について―　武井　昭夫　82～87
⑵革革革命　檜山　久雄　87～89
⑶暴力について　大野　正男　89～92
⑷日本経済の現状―二九年上半期の状態と独占資本の論理―　竹内　康宏　92～95
啄木伝承の方向　佐古純一郎　96～101
マルキ・ド・サド評伝（Ⅱ）　遠藤　周作　102～106
反逆の倫理（Ⅱ）―マチウ書試論―　吉本　隆明　107～117
編集後記　（日　野）　118

日野啓三の「埴谷雄高　あるいはひとつの精神的悲劇について」は、ヨーロッパ「先進国」の「近代的思考様式」と「後進国」の「アジア的思考様式」との対立の中心を、「個我」の問題とみて、これを支点にアジア人としての埴谷雄高の「精神的悲劇」を論じてものである。

劈頭日野啓三は「個物としての人間の起源」に関する「二つの伝説」を紹介している。ヨーロッパ的な『旧約聖書』「創世記」の言説と東方的なギリシア人の言説とである。前者は「神の意志」に従って、「神」に「祝福」されてこの「世界」に生まれてきた。だが、後者は、「神の意志」に反し「己の邪悪な意志」に従って「大いなる全体」から「自ら」を分離したというのだ。後者の「個我の実現」は、その本質において「瀆神的」で、悪と呪いの「悲劇」の道で、「死滅」の宣告を受けているというのだ。日野啓三は、後者の「東方的な考え方に親近を感じる」という。この親近感の裡に、「人間」中心主義の思想から離反する「素地」が感受される、といってもよかろう。

「巨大な専制君主を頭上に戴き、呪術と迷信の鎖で縛られた村落共同体社会の内部で、個我を自覚するということ」それは「現在の僕らの想像以上の悲劇を伴つて行われた」だろうと、日野啓三はいう。長い歴史の幾時代を通じ平和な共同体意識の中に眠りこんでいた「後進国」社会で、早急な「近代化」が行われ「個我の自覚」を促されることは、「瀆神的」な忌まわしい「悲劇」ではないか、というのだ。「これらの呪われた自我たち、意識して悪を意志し、罪を引き受けた魂たちによつて、その国の精神史は変革されるのだろう」ともいう。

この国の「個我の自覚」は、「近代以前的な共同体からの解放の過程」より、むしろ「近代を越えることをめざす運動組織からの脱落の過程」において行われたようにみえる。埴谷雄高は、その「最も典型的な一人だ」と、日野啓三はいう。それは彼が「かつて正式に非合法共産党の党員だつた事情による」のだろうといっている。彼は「自分の生身の体から腕の一本をもぎ離すようにして」自分自身をかつて「自ら信じた組織から引き抜いた」のだといい、「彼の個我の観念には、恐らく血が滲んでいる」という。「死霊」は、「転向という忌まわしい事件をとおして、自我の確立を徹底させねばならなかつた」その「不

幸な自覚」をこそ「根本のモチーフ」にしている、というのだ。

「死霊」に登場する三人の中心人物。主人公のひとりで日野啓三が「日頃偏愛する」という三輪與志、それに首猛夫と津田康造とについて、日野啓三は詳細に論じている。これら「死霊」の若者たちは、「個我の完全な自己主張」という壮大な「夢」と、「生ける全体からの恣意的な分離」に伴う怖るべき「罰」との双方を、負わされている。結論としては日野啓三は、作者の「理知を三輪與志」が、「行動の情熱を首猛夫」が、「アジア人としての宿命を津田康造」が担っているといい、彼らは「父なる権威と母なる調和の許から逃げ出した不逞の子」だという。「伝統のもの、公認のもの、大いなるもの、調和的なもの」に「意識して叛逆」し、「新しいもの、個別的なもの、否定的なもの」を「無限に追求」しようとするという。そのため、彼らは作者に代って「荒廃と孤独と破滅の罰を背負いゆく」というのだ。

「転向という屈辱的な事件」と「自我の自覚という信念甦生の物語」とが重なるという「精神的体験の二重性」、また「アジア的停滞性からの近代化という歴史的使命」と「個物の出現は悪の初りに他ならぬという形而上学的使命」とを、二つながら負わねばならぬところに、「作者の悲劇的位置」があり、「僕らの精神史の現実」があるという。「僕らの魂が哭きながら求めているもの」それは「完璧な生ける個体としての新しい人間の誕生、個我の自己主張がそのまま調和への讃歌となるような世界、《われ生きたり》と生を全的に肯定しつつ母なる大地にすつくと立つ瞬間―その新人、その新しい時」だといい、つぎのように結んでいる。

この確信こそこの強烈な陰画にも似た否定的精神＝死霊たちの、陰惨でしかも輝やかしい物語を支える眼にみえぬ支点であるに相違ない。反対にもしこの信じられぬものをも信じる信念と強烈な悪の自覚がなければ、古い共同体を離れた個我はそのまま生命力と創造力を失いて枯れてしぼむか、あるいは再び悪質な全体への埋没を夢みるようになるだろう。

埴谷雄高が、「死霊」で大きく踏みこんでいる新しい次元の問題、「政治と文学」という次元とはちがう「存在論の領域」、「存在の追求と表現」という現代的未来的問題には、まだこの論考では言及されていない。昭和三十年に入って、日野啓三の意識は大きく転換し、「存在と文学」がこれからの「文学のモチーフ」になる、と考えるようになるのだ。

なお、この「埴谷雄高あるいはひとつの精神的悲劇について」は、十分の一ほどに極度に短縮されて「現代の黙示録」と題され、『死霊限定版』（近代生活社、昭和三十一年九月十日付発行）に付された栞の「死霊の言葉」に、武田泰淳「死霊について」井上光晴「岸壁にて―埴谷雄高氏に―」本多秋五「異邦人の言葉」編集部「読者の理解のために」とともに収載された。さらに、日野啓三第四の著書『虚点の思想―動乱を越えるもの』（永田書房・昭和四十三年十二月二十五日付発行）に「埴谷雄高『死霊』論―呪われたものⅠ」と改題されて全文が収録されている。

却説、日野啓三の「編集後記」によれば、第二号は「秋風立つ頃に出るはずだった」という。「多分三号からは、新しい季節の訪れごと

に、新しい号を出してゆけるものと思う」といい「三号は三月一日発行の予定。昭和二十九年も終るので、昭和二十年代の批判として「戦後十年の諸問題」を特集することになっている。」として、次のような「予告」を掲げている。

現代評論三号予告

★戦後十年の諸問題★

村松剛・佐古純一郎・武井昭夫・清岡卓行・若林真・檜山久雄・奥野健男・服部達

《公開状》

花田清輝氏へ……木内　公

中村光夫氏へ……日沼倫太郎

竹内　好氏へ……日野　啓三

《今日の問題》

美術・東野芳明　世代・矢島進　政治・濱田新一　（その他）

カミユ論……中野　武彦

叛逆の論理（Ⅲ）……吉本　隆明

マルキ・ド・サド（Ⅲ）……遠藤　周作

「編集後記」に「僕らは決して二号や三号で投げだすような仕事を始めたつもりはない」とあるが、「現代評論」の第三号は、遂に日の目をみることがないままに畢った。

Ⅲ　「新日本文学」の「読書ノート」

昭和二十九（一九五四）年後半期日野啓三は、「新日本文学」に共同執筆の形で「読書ノート」を連載している。署名は「日野啓」。共同執筆者が、服部達、奥野健男等「現代評論」の同人たちであること、また、日野啓三の小説の処女作「向う側」（「季刊審美」第二号、昭和四十一年三月二十四日付発行）が「野火啓」の筆名で発表されていることなどから、「日野啓」は「日野啓三」の筆名と断じてよいと思う。

猶、「読書ノート」（「新日本文学」第九巻第十二号、昭和二十九年十二月一日付発行）に、服部達のつぎのような言説があった。

先日、「新日本文学」の編集部から私のところへ、**モーロア**の**『ジョルジュ・サンド』**（新潮社）と**小田切秀雄**の**『小林多喜二』**（要書房）を送ってきた。今日はまた、**荒畑寒村**著**『ひとすじの道』**（慶友社）というのが来ている。「読書ノート」で扱え、というわけだろうが、いずれもこちらから希望した書物ではない。書評ならともかく、読書ノートとあるからには、自分が読みたいと思って読んだ書物の感想を、自由な形で（むろん公的に発表することから来る必然の制約はあるわけだが）書き綴ればいいのだ。という風に私としては考えている。だから、送りつけられた書物は、送りつけられたということで、それだけ何か縁遠いものに感じられた。もしかすると、お前はふだんロクでもない本ばかり読んでいるのだろうから、こういうしっかりしたものを読んで自己改造をしろ、と言われているのかも知れぬ、とひがんでみたりし

た。

この言説から推して、「読書ノート」は、「自分が読みたいと思つて読んだ書物の感想を、自由な形で書き綴」ったものではなく、いずれも「新日本文学」の編集部から「「読書ノート」で扱え、というわけで」「送りつけられた書物」の「感想」を「書き綴」ったものであったようだ。「日野啓」の「読書ノート」も、その例外ではなかろう。

七月号の「読書ノート」

「新日本文学」第九巻第六号、昭和二十九年六月号に所掲の「ノート」は、浜田新一、大野正男、村松剛の連名であった。この三人は、旧制一高出身者によって発行されていた「世代」（昭和二十一年七月創刊、昭和二十八年二月終刊）の同人で、「現代評論」にも参加していた。七月号（第九巻第七号、昭和二十九年七月一日付発行）所掲の「読書ノート」は、服部達、奥野健男、日野啓の連名で、「批評の方向」の標題で掲げられ、六冊の「書」が取り上げられている。標題の下に掲げられている「服部達／奥野健男／日野啓」の順に、二冊づつ担当したとするのが穏当な推定であろう。とすれば、「日野啓」の担当は、「未来芸術学院」叢書の「エレンブルグ「作家の仕事」」と「矛盾ほか「新中国の創作理論」」ということになる。この二冊の「書」を「日野啓」は、エレンブルグ著、鹿島保夫訳『作家の仕事（未来芸術学院６）』（未来社、昭和二十九年五月一日付発行）と茅盾、蕭殷、周揚、胡可、何基芳著、中国文学藝術研究会訳『新中国の創作理論（未来藝術学院２）』（未来社、昭和二十九年三月十日付発行）とで読んだのであろう。

却説、「ソヴエトの作品は、すべてがととのつているようで、そのくせ何かが欠けている。」という読者の手紙に対する回答として書かれた『作家の仕事』*О писательском труде* でエレンブルグは「「生きた人間が欠けているのだ」という以上のことは何もわからない」と書いている。日野啓は、「エレンブルグもボケてきたな、と思つた」ようだが、「真実はその反対である」という。「読み終つてナンダツマラナイ、と思わせるように書くことによつてかえつて、事態の恐ろしさはヒシヒシと感じさせられる」「むつかしいのは、あたりまえなことが見失われている事態がいかに容易ならぬものであるかということを少しばかり非凡な仕方で語ることであろう」というのだ。

同じ叢書の『新中国の創作理論』は、「新中国の第一線批評家、作家たちの講演集のごときもの」である。「これを読んでひどく感心した」という。「低い理論と高い人間性とが有機的に結びついている」というのだ。たとえば「矛盾はまるで小学生の校長先生のような口調で、毎日ノートをとること、マルクス主義の本を系統的に勉強すること、指導的な同志とよく話合うこと、「人物大綱」をかいて登場人物をはつきりつかまえることなどを説いている。」これに対し日野啓は「文学とはもともとそうしたものではなかつたか。」というのである。

八月号の「読書ノート」

「新日本文学」八月号（第九巻第八号、昭和二十九年八月一日付発

行）の「読書ノート」は、「小説世界の現情」（「目次」では「小説世界の現実」）の標題の下、六冊の「書」が取り上げられている。本文所載頁に揚げられている「服部達／奥野健男／日野啓」の順に二冊づつ担当したのだとすれば、「日野啓」の担当は壷井栄『岸打つ波』（光文社、昭和二十九年六月十日付発行）と大田洋子『半人間』（講談社、昭和二十九年五月五日付発行）ということになろう。

この二作品を読んで日野啓は、「社会の矛盾」が「集中的に」皺寄せされる「弱い部分の歪み」を「現実的に描き出し」ていて、「この時代、この社会の非人間性の全貌」が「明確に浮かび上がってくる」と感じたという。しかし「この社会体制そのものを変革」するためには、「時代の矛盾を自らの矛盾」とし「現実の悪を自らの内部に耐え」、自ら「手を汚す」ことを引き受け「加害者の悪意」にも対抗しうる「善意と良心」の文学、新しい歴史を創ってゆく「創造者」の文学を考える必要があるというのだ。「カラマーゾフの兄弟」の大審問官や「正義の人々」のカリアーエフに共鳴を示した日野啓三の、当然の言説であったと思われる。

九月号の「読書ノート」

「新日本文学」九月号（第九巻第九号、昭和二十九年九月一日付発行）の「読書ノート」は、「善意と現実」の標題の下、七冊の「書」が取り上げられている。「奥野健男／日野啓／吉本隆明」の順に執筆者名が掲げられ、「1」「2」「3」の章分けがなされているから、この順に各章が担当されたのであろう。「日野啓」の担当は「2」の石川達三『悪の愉しさ』（講談社、昭和二十九年六月三十日付発行）と広津和郎『泉へのみち』（朝日新聞社、昭和二十九年七月十五日付発行）とであったと推定される。服部達は、「神経衰弱気味」で執筆困難を申し出、代理に吉本隆明を奥野健男が推挙したのであろう。

『泉へのみち』は「朝日新聞」に『悪の愉しみ』は「読売新聞」に、各々連載された新聞小説を書籍化したものだ。『泉へのみち』は、女子大出の婦人雑誌記者を主人公にしている。「作者の意図」は、「古い因習や家の束縛」「物質的な困難」等に煩わされない状況を設定して、向日的で「真直に健康に〝生の泉〟へとのびてゆく」新しい女性の典型を描くことにあった、と日野啓は推定する。「敗戦」という「犠牲」も、こうした「新しい人間」を産み出す「代償」であったのだ、という「感じ」さえ抱くという。一方『悪の愉しみ』の主人公は、平凡なサラリーマンである。毎日同じ仕事を無意味に「賽の河原で石を積む」ように繰り返している。「作者はこの人物を思い切り平凡で醜悪でいやらしく描いている。」日野啓は、これもまた日本「近代の風景」である、という。『泉へのみち』を「近代の薄つぺらい陽画」だとすれば、『悪の愉しみ』は「薄汚い陰画」だというのだ。「打解の道」は、ない。やがて辿り着いた「泉」が「泥沼」でしかなく、「悪」とは「真に恐るべきもの」と気づいたとき、「新しい可能性が生れる」かもしれないし、「奇蹟が訪れる」かもしれないが、「全然何もない」かもしれない。「それでもいい」「みみっちい四畳半でぬくぬくと尻を落着けている人種」だけは大嫌いだというのである。

十月号の「読書ノート」

「新日本文学」十月号（第九巻第十号、昭和二十九年十月一日付発行）の「読書ノート」は、「新風への道」の標題で、「吉本隆明／日野啓／奥野健男」の順に執筆者名が掲げられ、「1」「2」「3」の章分けがなされている。「日野啓」の担当と推定される「2」では、四つの作品が取り上げられている。これら四つの作品を「日野啓」は、エ・ゲ・カザケーヴィチ著、泉三太郎訳『オーデルの春上巻（ダヴィッド選書）』（ダヴィッド社、昭和二十九年五月十日付発行）、同『オーデルの春下巻（ダヴィッド選書）』（同、昭和二十九年六月十日付発行）、ホワン・エルマーノス著、松浪信三郎訳『希望の終り（ダヴィッド選書）』（ダヴィッド社、昭和二十九年七月一日付発行）、茅盾著、小野忍訳『腐蝕』（筑摩書房、昭和二十九年十月三十日付発行）、アンドレ・スチール著、河合亨訳『最初の衝突第一部基地の人々』（白水社、昭和二十八年九月二十日付発行）、同『最初の衝突第二部大砲の積みおろし』（同、昭和二十九年一月三十日付発行）、同『最初の衝突第三部パリは我らとともに』（同、昭和二十九年八月十五日付発行）などの「書」で読んだのであろう。

まず、ソヴエト戦後文学の代表作家カザケーヴィチの『オーデルの春』*Весна на Одере* は、あの戦争が「社会主義の祖国を守る」という「意義」をもち、「歴史の進歩の側に立つ」自分たちは「必ず勝つ」という「確信」に貫かれ、「手放しの明るさ」が全篇に溢れている。一方、エルマーノスの『希望の終り』*La fine de l'espoin* は、フランコの弾圧下におけるスペインのレジスタンスの「絶望の記録」で、茅盾の『腐蝕』も「国民政府の女スパイの生活を描いて絶望の証言文学」である。日野啓は、『オーデルの春』よりも、『希望の終り』や『腐蝕』に証言された「惨澹たる事実や無念の思いにも堪えうる」「巾と深さ」が欲しいといい、「ソヴエトのものといえば諸手をあげてほめあげる一部のニセ文学者」を批判。自ら「社会の現状に相応したレアリズムの方法をつくりあげねばならない」といい、アンドレ・スティルの『最初の衝突』*Le premier choc* の方法を暗示的だといって紹介している。まず「何人もの登場人物の生活を一見無関係のように並列して押しすすめ、最後でひとつの共通の闘争の場面にしぼってゆく」映画的な構成法。いまひとつは「作者が登場人物の内部にもぐりこむ。作者とともに読者も小説の中に入りこむ。登場人物とともに読者も考える。」これは、観客を劇の中に参加（アンガジェ）させる「実存主義演劇」に似た方法である。二つの方法によって「登場人物の一人一人が内からと外からと立体的に描かれ、集団全体が立体的に描かれる」というのだ。

『希望の終り』の巻頭に付されたジャン・ポール・サルトルの序文「本書のために」（5～7頁）を「出色の名文章」と称賛し、『最初の衝突』の紹介では「サルトルたちの実存主義演劇の方法」の有効性を指摘するなど、『存在と無』*L'être et le néant* の著者の文業に強い関心を示していて、人間中心主義の世界観からの脱却の兆しが感受されて目を牽く。

十一月号の「読書ノート」

「新日本文学」十一月号（第九巻第十一号、昭和二十九年十一月一日付発行）の「読書ノート」は、「起伏のある潮流」の標題で、★印

によって区別された二つの文章が「日野啓／奥野健男」の名で掲げられ、各文末には（日野啓）（奥野健男）の名がある。「日野啓」担当の文章では、三冊の「書」が取り上げられている。

まず、中野重治『むらぎも』（講談社、昭和二十九年八月三十日付発行）。大正と昭和との境い目の頃の東京帝大を舞台に、「新人会」の組織に身を置く安吉を主人公にし、「唯一の正しい青春」を描いている、と日野啓はいうのだ。作者のバックボーンは、「アジアの貧しい農民の、丁度雑草のように根強い心だ」という。「脚は大地に密着し、自分の素足の黙々たる歩み以外を信じない」。「遅々として確実に」「弛緩することない歩みのもつ正しさ」。ここに「西洋人には理解できない」「アジアにおけるコミュニズムの道行きの本質がある」という。この主人公に日野啓は、中村真一郎たちのいう「二十世紀小説」的「シャレた手法」とは異なる「些細なこともおろそかにしない着実さ」と「自由に感じ考えようとするゆたかな精神」を見るのである。

そのあと、二人の女流作家の短篇集を取り上げている。『月夜の傘』（筑摩書房、昭和二十九年八月十日付発行）の作者壷井栄は「自分のペースを身につけており、無理な背のびをしていない」と、その「活動ぶり」に「好感」を示している。しかし、「この程度の純粋に女性的で、幾分感傷的な反戦調では、戦争を導くメカニズムの巨大な必然性や、軍国主義者の怒号に対してあまりに無力だ」といい、「女の悲しさ」に「余りもたれかかると、甘さがにじみ出す」と批判している。『黄色い煙』（筑摩書房、昭和二十九年八月二十五日付発行）の作者佐多稲子は、「自分のペース」を定めておらず「腰がすわっていない」。その作品は「モチーフの醗酵が足らない」といい、「もう一度、戦争責任の問題を冷静に自己批判して、それから出直した方がよい」と、作者の「甘え」をきびしく批判している。

当時の日野啓三の「いかに生くべきか」「われら何をなすべきか」についての考えが、端的に示されている「ノート」といってよかろう。

十二月号の「読書ノート」

「新日本文学」十二月号（第九巻第十二号、昭和二十九年十二月一日付発行）では、「読書ノート」の標題で「服部達／日野啓／奥野健男」の筆者名が掲げられ、各文末にこの三者の名が記されている。

日野啓の文章は、「あるものが意味をもつのは他者との関係においてだけである。」と始められている。当時彼が関心を示していたサルトルの著作の影響を感じさせる。現代における人間にとっての「絶対的な生の意味づけの根拠」は、「神」と「歴史」とで、「神の存在」と「歴史の進歩」とを「神話」としてしか感じられなくなった状態は「絶対的ニヒリズム」で、そこでその人の「人生」は、「意味を失う」というのだ。

三島由紀夫の短篇集『鍵のかかる部屋（昭和名作選５）』（新潮社、昭和二十九年十月十五日付発行）を読むと「行間に研ぎすまされた刃物がちらつく」のをみる思いがし、「世界との温い関係を未練なく断ち切ろうとする冴え」を感じる、と日野啓はいう。三島由紀夫の小説に必ず「血」が出てくるのは、「世界と自分との紐帯」を、「他の人間との関係」を、「自分の生存の意味を仮託するあらゆるもの」を、

「非情」に断ち切るためである。「血」は「覚悟の証」であり、「達成の徴」だという。彼は「石ころや木片をみる」のと同様に「他人を見る」にちがいない、というのだ。最近作『鍵のかかる部屋』には、彼が「完全に無意味な状態」にまで辿りついた「自分の状態」を、「凝視」しはじめた「証拠」がみられる、という。『鍵のかかる部屋』のような「暗すぎる作品」と『潮騒（長篇書き下し叢書４）』（新潮社、昭和二十九年六月十日付発行）のような「明るすぎる作品」とを、「ほぼ同じ頃に書かねばならなくなったということ」に、彼の「絶望的状態」を感ずると、日野啓はいうのだ。「暗すぎる陽画」と「明るすぎる陰画」との「対象は同一」で、「絶対的ニヒリズム」だというのだ。これは優れた見解である。「絶対的ニヒリズム」とは、換言すれば、「人間」を「主体」とする「世界観」からの脱却ということでもあろう。「人間」にとっての「意味」という色眼鏡をかけて「世界」を見ないで、裸眼で直接に「世界」を見るということだろう。しかし、当時の「日野啓」は、「彼は現代のニヒリズムを最も正しく表現している現代作家のひとりだ」といいながら、彼は「フアシズムの非人間性を否定するに足るような何らかの真実を表現しようとしていない」と「指摘」し「文学とともに人間をも僕は信じたい」と結んでいる。ここで日野啓のいう「真実」とは、「人間」にとっての「意味」であろう。

同じ叢書の井上靖『末裔（昭和名作選４）』（新潮社、昭和二十九年十月十五日付発行）。三島由紀夫が「すべてを拒もう」「何も信じまい」とするとき、井上靖は「ひとつのものを懸命にかばい守ろう」とし「ひとつのことだけを信じよう」としている。井上靖が守ろうとする「ひとつの真実」とは、「人間の生きる淋しさ」のようなものではないかと、日野啓はいう。井上靖の文学の基礎構造は、短篇「利休の死」によく出ている。秀吉と利休との対立を通して「この世で一番貴いもの」が示されるのだが、「対立のさせ方」が「機械的」だと批判する。井上靖が「ひとつのものを懸命に守ろう」とするのに対し、長谷川四郎の『赤い岩』（みすず書房、昭和二十九年九月三十日付発行）は、「楽々とひとつのことにしか関心を示さない」。井上靖のように「機械的に反撥」したり、長谷川四郎のように「うまくすりぬける」だけでは、作品の感動は弱くかぼそい。その点日野啓は、彼らの「ささやかな人間性」より、むしろ三島由紀夫の「危険な非人間性」の方を好む、というのだ。「実際に作品を読んだとき」のこの「僞らぬ印象」が、やがて日野啓三に、あざやかな転換を示す「三島由紀夫論」（『昭和の作家たちⅢ（現代作家論叢書７）』英宝社、昭和三十年十一年三十日付発行）を執筆させるのである。〈一九五五・八・八、執筆〉のこの稿において日野啓三は、「《いかに生くべきか》とか《われら何をなすべきか》といつた風な問いを自らに問うこと」はしないと、「人間」を「主体」とする「世界観」からの脱却を宣言。「自分は果して存在しているのか、という底深い問い」を発して、「路傍の小石や窓外の樹の枝と同じように《それが唯そこに在る》という以上の何の意味も必要としない確実な存在と化したいというささやかな願い」を抱くようになるのだ。

付記　引用文中の仮名遣いは原文のままとした。

（やまのうち　しょうし）